

勸善懲惡錦言

第七十八號

再々王子見立も三十日の月を見  
るにつけ真実有契情の一語を聞き  
新町通り二丁目高橋某の娼婦  
若鷲くはる者の親里阿波座下通  
二丁目父の世を去り母  
老年兄は多病貧苦させまて

遊女とせんやりの過る手  
御布告までとらざる  
親を歸れども人ませ水増  
か却て一人の口がふまはる貧苦を  
ほしてをそれぬ業の賃洗濯するあり  
まは母兄はつた実意を賞美して  
或る且那家が世捨てやとていざ若鷲  
承知せむ今中客をとりては是迄の親方  
義理たぐいと貧苦の中より我をよめる其  
真意を高橋が聞て大い感動入我家へ  
呼り元の如く娼婦は返其得る所の金を  
こみかく若鷲はあらは是よりいづて若鷲  
は母を安穩に養ふと名これ孝子の徳とい



本町時習  
藤井

80  
75  
70  
65  
60